
前夜の水かけ論

長崎秋緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前夜の水かけ論

【ZPDF】

Z7460F

【作者名】

長崎秋緒

【あらすじ】

結婚式前夜でのわたしと彼のやりとり。

結婚式前夜に親しい友人だけで、独身生活の最後を華々しく、賑やかに祝つてやるのが、世間一般の通例のようになつてゐるのは、やはり結婚が他人を縛りつけるという側面を示しているところもあるからだとわたしは考えていた。

同級生の彼は学生時代から、親切で、よく気がつき、誠実で、とてもじやないが浮氣などできるような奴ではないというのが、わたし達友人共通の認識だった。

小さな居酒屋を借り切つて、おそらく最後になるだらう晚餐を、年齢にそぐわぬはしゃぎぶりで、わたし達は学生時代ののりで、飲み食いを楽しんでいた。

そういうた会は、長引くにつれしだいに沈静化していくのが通常の流れだつた。そうなると自然と、誰からともなく、しんみりとした会話を始めだすものがいても、特別不思議ではなかつたし、皆がそれを待ち構えていたように、それぞれの結婚観を話し出す。

カウンターに明日の主役の彼がひとりで酒をやつていた。わたしは彼のおもしろくない様子が気になり、となりのイスに座り、当たり障りのない祝いの言葉から入ることにした。

彼は皮肉を言われたものと感じたらしく、わたしに對し敵意さえ見せ、その話はしたくないことが表情からも窺えた。しばらく黙つて酒をちびりちびりとやつしていると、やっぱり誰かに聞いてもらいたい人間の特性には勝てずに、彼の口から、不機嫌の原因が語られ始めた。

まず彼は、わたしに對し恋愛における“ふたまた”という行為についてどのように考えているのかを尋ねてきた。わたしは社会道德に沿つた受け答えをした。

「いかにもおまえらしいものの言い方だな」

わたしの口調が堅苦しいのは、わたし自身も認めていたから、彼

の言葉を特に気にもしなかった。つづけて彼が、おまえはこういったことに関しては潔癖だからな、と社会人になつてから知り合つた同僚の女性について話し出した。それから入社して通い始めた英会話教室で出会つた女性についても教えてくれた。その内容から、二人の女性には外見の特徴はほとんど共通する点がないようと思われたし、一人の女性が彼のふたまたの相手だということはすぐに察しがついたから、先回りをしてこれから語られることは、彼の過去の清算、結婚前にみそぎをするものだと決めつけていた。

彼が言うには、彼女達との出会いは偶然のなせる業だそうで、世間に存在する不逞というものは無縁だと思つていた自分が、そんなことができたのが不思議でならないというものだった。

「おれやおまえは学生時代に、平氣で女を弄ぶような連中をよく中傷していたよな。あんな連中には理性がないから、限りなく^{けもの}獣に近い人間だつて揶揄してさ。けど、おれもあの連中の仲間になつたらしい」

わたしから話すこともなかつたので、彼の言葉を自分なりに解釈をしてみようと試みた。

彼が一度に一人の女性と付き合つたということは、彼の言葉に頼るしかなかつたし、わざわざこんなところで嘘を言う必要性も感じられなかつたからそうだとしても、はどうしてわたしにだけ打ち明けてくれたのだろうか、という疑問が湧き、それだけ訊いてみた。

「さつきも言つたけど、おまえはこういうことに関しては潔癖だからだよ。あいつらじゃ話にならないからな」と、テーブル席でどんちゃんさわぎする友人たちを指差し、「あいつらならすぐに結論づけしてくれるから、それじゃ困るんだ。おまえみたいに、すぐには結論をださず、しばらく考え込んでくれる、ひねくれた奴じやないと意味がないんだ。おまえは潔癖だけど、他人の意見をすぐに排除してしまつような奴でもない。だから、この話にはおまえが適任だと思った」

「なんだか、重い責任を負わされたみたいだ」とわたしはおおげさ

に驚いてみせた。

「なあ、あの時確かに俺は浮気をしたんだよ」

「浮気ではないだろ?」

「浮気とふたまたってのは、結局は相手を裏切ったところでは似たようなもんだろ?だからこりでは細かく区別する」とはせずにそういうたまでだ

「君は一人を裏切って、両方と交際してたってことでいいか。だとしても、君のはちょっと種類が違う気がするんだけど」

「種類? おれが望むべくして浮気をしたわけではないということか?」

「違う。君が望んでふたまたをしたことは間違いない。ぼくが言いたいのは、君がそのことを自然現象のように、自分の意思とは関係ないところで起きた出来事のように話していることだよ」

「だつてそつだろ。あの当時のおれは会社で知り合つた彼女と、英会話教室で仲良くなつた彼女のどちらとも付き合つつもりはなかつたんだから」

「君は好きでもない相手と交際したってことの? そのほうが道徳的には罪が重い気がするんだけど」

「罪? おれがなにを犯したっていうんだよ。それに付き合つ気がないつて言つたのは、出会つてまだ日の浅い時のことだ。ふたりと親しい友人として遊ぶようになつて少しづつ感情が変化していつただけだ」

わたしはいつの間にか、彼を罪人にしていた自分に気がつき、話を戻した。

「つまり、同時進行で彼女達に恋愛感情が生まれてきたっていう認識でいい?」

「そういうことになるな。でも、それがある時点になるまでおれには、まるで別の出来事のようにしか感じられなかつたことが不思議なんだ。その時のおれは一人いて、それぞれ別の意思を持つて彼女達と交際していたようで、その時はふたまたしてゐるっていう感覚は

なく、当然自分の行為にも何かしら、おまえのいうところの罪の意識を感じることもなかつた。あれはきわめて純粋な交際だった

「なんだか変な話だ。まさか変な病氣にかかつたなんていうつもりじゃないだろうね。それだつたらぼくの手には負えないよ」

「おれは健全だ。だからおかしいんだよ。何故あの時あんなことになつたのかが」

「君はさつきから一貫して、彼女達と同時に交際を始めたのが自らの意思を越えた、自然現象のような話し方をしてるけど、交際を申し込んだのは君か？ 彼女達か？」

「こどもじやあるまいし、いちいち告白なんてまねしなくつたって、男と女が深い関係になるのには、言葉が不必要なときだつてあるだろ」

「確かに、そういう交際の始まり方もあるだろ？ けど、誘つたのはどつちだ？ それも成り行きで済ますつもり？」

「追及されてるみたいだな。そうだな、成り行きだ。だからそれもおれの理解を超えたところで起きた現象なんだ」

「だからって、彼女達と付き合つと決めたのは君の選択によるものだと思うよ」

「選んでそうしたんじやない。信じてもらえないかも知れないけれど、あの時はとても恐ろしい偶然の連続によつて引き起つたされた自然現象の結果があれにそうさせたんだ」

「何故、その時だけに倫理觀とか道徳性を考えなかつたんだ。そのくらい恋愛にのめり込んで思考が麻痺してたつていうの？」

「麻痺つていうのは少し感じが違うな。会社でのおれは、その役割に従つた行動をした結果彼女と知り合い交際することになつた。もつとも交際という言い方が適切かは分からぬけど。英会話教室でも同様におれは生徒としての自分の役割を果たしていった

「つまり、環境に伴い君は自分の人格を適応させていたということになる。やうすると君の本心はどこにあるの？」

「両方だよ。どれもおれであり、おれ自身の起つしたことだよ。な

ぜなら、そのどちらの記憶もおれが保有しているからだ。別に言い訳をしたいんじゃないくて、強調して言つけど、おれは本当にそんなことがしたくてそうなつたわけじゃないんだ。事実あれ以来そんなことはなかつたんだから

「無料な質問かもしれないけど、その後彼女達とはどうなつたの？ どういう別れ方をしたんだ？」

「一人にばれて振られたつて思つただろ？ でもそうじゃなかつたんだ。うまい具合に、本当にあらかじめそうなるように決められた決定事項みたく、ふたりがおれから離れていつたんだ、同時期に。これだつてそうとうな確率だよ。これをおれが計画的に行つたなんて疑わないだろ？」

「人を好きになる感情は、確かに突然、自然発生的に起つるという側面も認めるよ。別れる時もそんなことがあるかもしない。でも彼女達と付き合つと選択したのは君であり、君だけが彼女達に嘘をついているといつこともまた事実だ」

「おれは嘘なんてついてないよ。彼女達は結局お互のことを知らないまま、おれのもとを去つて行つたんだからな」

「どうも腑に落ちないな」

「何がだよ。なるべくしてそうなつたつていう、運命というものを否定的におまえがみてているのは知つていいけど、だけどそうなつたんだよ。それに変わる解釈があるのなら、おれ自身興味があるよ。それをおまえなら発見してくれそだと思つて、こんな内情を告白したんだぞ」

「まるで、ぼくにはそれを究明する義務があるみたいな言い方だね」「実際おれはそれを望んでいるんだ。おまえなら何かしら結論を導き出してくれるような気がするから」

「そんなんにまで君がぼくをかつてくれていたことは素直に喜ぶよ。でもぼくには君を満足させるような解答は無理だ。だつてぼくにはもう、君とは違う結論がでているんだから」

「それは、当然おれにとつて不都合なものなんだろうな？ そんな

持つて回つた言い方をするくらいだから

「そうだね。君は、恋愛感情は己の知らぬ、強力な力によつて起ころものだとしているけど、ぼくもそう思つよ。でも、君が彼女達と交際したことは人為的な選択によるものだ。だから、ぼくは、全てが自然の成り行きに沿つて行われていたという君の言い分は許容できない。君は選んだ。彼女達と同時に付き合つことを。それは自然現象でも、偶然でもない。君の選択によつて決められたことなんだよ」

「水かけ論になりそうな気配がしてきたな」

彼の提案でわたし達は、休憩をはさむことにした。彼が浮氣という言葉を最初に選んだ時点で、彼は同時期に彼女達との交際を始めたわけではない、ということは判断できた。それならば、何に対し彼が憤りを感じているのか、わたしはそこに興味があつた。

「ところで、なんで今更こんなこと打ち明けたんだ？ いつちゃあなんだが、過去のことだろ。君自身罪ではないと主張してるんだから、忘れたら済むことじやないか。それともまた同じことが起きそう、または起きているってことで悩んでいるのか……」

「そうなつたらおもしろいんだけどな。現実はひどく平凡なもんだよ。ないね、そんなぞつとするような展開は」

わたしは彼が酒のつまみにそんな話をしたとは到底思えなかつた。なにかしら、彼にしか分からぬ事情があるはずだと睨んでいた。そのひとつが今、彼自身の発言で解消された。彼は現在浮氣をしているわけではないらしい、ということだが。

彼は、単に過去にこだわつてゐるだけで、いふなれば“男のマリッジブルー”にでもかかつてゐるのだろうか。その症状のひとつとしてふたまたの罪を、彼は無意識のうちに感じて贖罪のつもりで、その問題、男女間においては高潔な考え方の持ち主であるらしいわたしに、牧師の役割を与えたと考へるなら納得がいった。

わたしには彼が言つほどの高潔さはなかつたが、浮氣とか不倫とかいう言葉を毛嫌いするのは、裏切り行為という点においてだつた。

わたし自身他人に欺かされることを好まなかつたし、他人を騙すような真似を禁じていた。その道筋を辿つていく先に、恋愛における裏切り行為があつただけで、なにもそれだけを特別に敵視していたわけではなかつた。

それにしても、わたしには彼の行動に、ある意味を持たせるための材料が決定的に不足していた。彼自身もそつだが、この話の突破口がないのが一番痛かつた。動きようがないのだ。

「なあ、その二人と交際していた時のこと、詳しく聞かせてくれないか」

「あの当時、会社は日曜日と祝日しか休みがなかつたから、会社の彼女とは休日に出かけることが多かつた。それもお互いの会社の都合でそうせざるをえなかつたとも言えるけど、これはおまえが嫌いそうだから、やめとこう。英会話教室で知り合つた、めんどくさいな、社外の女と言つておこうか、水曜日授業が終わつた後そのまま彼女の部屋に行くことが多かつた気がする」

「自分の部屋に呼ばなかつたのは、その、会社の彼女に対する配慮からかな?」

「それもある。けど、それは二人との付き合いが深いものになつてからだ。その時はまだ社外のともだちと遊んでいる感覚だつたからな」

「社内の彼女とは?」

「ともだちだつたかつてことか? そうだ。職場の同僚と休日前の夜に飲みにいつたつて不思議ではないだろ」

「確かに。それじゃあ、どちらが先に、というよりは、どちらを先に恋愛の対象としてみるようになつた?」

「社外の女かな。最初に肉体関係を結んだのがそつだから。なんか、肉体関係つていやらしい言葉だな」

「その後に社内の彼女と関係を持つた」

「彼は、そつだとうなずいた。やや自信あり気な表情がわたしには不満だつた。

「それなら君の言う、同時に一人を好きになつたつていう言葉は嘘になる」

「はつ、そんな瞬間的なこといつてどうなるよ。何にだつて誤差はあるだろ。あくまで同時期に好きになつたつてことだよ」

「好きになるところは、相手を恋愛の対象として認識した、といふことだね」

「よせよ。それも時間差の問題であつて、好きになつたつて言葉を選んだのはまずかったな。どういえば納得するんだ」

「ぼくを納得させじどうする。今語り合つてることは君のことなんだから」

「そうだつたな。おまえの口調が変わってきたから、威圧的な感じがする。それでちょっと無意識に防御の姿勢をとつたんだな」

わたしは、問い合わせようという気が先走つて、彼の口を塞いでしまう可能性があることに、意識的な笑顔を口元で表し、あくまでわたしは彼の友人であり、味方であることを強調して言った。

「現在の、明日式を挙げる相手を大切にすれば、何も君には悪いところはないよ」

「なんども言うが、おれは懺悔してるつもりはないんだ。ただ、敬虔なおれが、どうしてあの時期に限つて一人の女と同時期に付き合うことができたのか、その因果関係をはつきりさせたいだけなんだ」

因果、という言葉に彼の心根があるとわたしは確信した。結論はすでについていた。彼は明らかに過去のふたまたという行為に対し罪悪感を持っている。それを因果、つまりは人間の手には負えない世界観外での出来事ととらえていたことから、彼がそれを認めたくないことは想像がつく。しかし、彼自身が語ったように、本質的に彼は善人だった。だからこそ、罪を浚つてくれそうなわたしに告白をしたのだろう。悪意があるとすれば、彼の責任転嫁のやり方の巧妙さにおいてだろう。彼は、彼の問題をわたしに考えさせた。これは決定権の放棄とも呼べる。彼はわたしに自身の問題解決を委託したのだ。

それなのに、わたしの出した結論にあからさまに不満げな様子をみせている。それは彼には自分自身の結論があることを示していた。なのに、彼はわたしに対し従順であるような口ぶりでいて、わたしに表面的な決定権しか与えていなかつた。彼の望む解答を、彼がわたしに要求しているのだ。好きなように描いて構わないといわれたキャンバスに、あらかじめうつすらとした線で別の絵が描いてあるような不自由さがある。彼は巧みにわたしを利用し罪悪感から逃れようとしていた。そのまま見過しすことも考えた。明日結婚式を控えている彼を不愉快な気分で送り出してやることもないし、わたしにとつても、何の実りもない会話で友人関係にひびをいたくはなかつた。けれど、一言くらいは本心を彼に伝えてやりたかつた。

「ぼくが浮氣や不倫をしたら、君はもちろん許してくれるんだよね？」

「許すもなにも、おまえの人生だら？ もちろん、おまえにそんなことができるとは思えないけどな」

「どうして言い切れる？ 自然発生的に起きるかもしないだろ？」

その言葉は失敗だつた。しかしそうに遅かつた。彼はまた防御の姿勢をとつていた。不愉快さを隠そつともせずにこりりを睨みつけて言つた。

「もうおまえの皮肉にはうんざりだ。やめよつ、こんな無駄話。何にもならなかつた。おまえのせいで結婚するのが嫌になつてきた」
けんか腰の彼をなだめすかすよう酒を勧め、わたしは「冗談でもそんなこといつもんじやないよ、と親しみを込めて彼の肩に手をのせた。

「明日から、きっと幸せになれるよ。それだけ考えればいいじゃないか。そのことで誰も傷ついていないんだから」

「誰も傷ついていない」

彼はその言葉に惹かれたらしく、また繰り返し口に出して言つた。
そうだ、誰も傷ついてなんかいない。これは悩むべきことではなかつた、と。

翌日無事にわたしは彼らの幸福を祝うことができた。それでも彼らの結婚に暗い影を落とすものの存在を忘れるることはできなかつた。その時、また彼は誰かに自らの決定権を手渡したふりをして、自分の結論を、他人から差し出された贈り物のように受け取るのだろう、というわたしの考えは確かにようと思われた。彼は誰も傷つけではないし、法律を犯したわけでもなかつた。倫理や道徳の面からも、絶対的に否定できるものではなかつた。だいたい些細な嘘なんて誰でもつくものだ。小さな嘘を大事にしてやることもない。わたしの問題ではないのだから。それでも他人に、現実の彼ら自身の姿を見させるという作業が、どれほど大きな精神的エネルギーを必要とするのかが知れただけ、わたしの方にも収穫はあつたことがせめてもの救いだと考へることにした。それにしても彼は一体何がしたかったのだろうか、という疑問は以前残る。自分を知ろうとしたのだろうか？ ちんぷな言葉でなぞらえるなら、自分探しとでもいうのだろう。それならば今いる自分で十分だろう。

ひとは本当の自分というものを、いつも現在よりも高い位置にいるものと信じて自分探しをするのだろうけど、探し当てた本当の自分の姿が薄汚れたホームレスの姿ではないと、どうして言い切れるのだろうか。自分を探そうとした時からすでに、自らが現在の自分から外れることを望んでいる事実をどうして認めようとしないのか。結論はもうついていると決めつけるのは早いかもしれないが、それは強固な自己愛のなせる業だとしか、わたしには考えられなかつた。あんな些細なことでさえ、認知しようとしてない彼を馬鹿にしているのではない。むしろ人間らしさを彼に再確認させられたことに感謝したいくらいだった。

あの夜の対話で得をしたのは、わたしの方かもしれない、と引き出物のおまけとして、彼のわざやかな悪意をありがたくいただいておくことにした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7460f/>

前夜の水かけ論

2011年9月11日03時23分発行